

アシュリー事件に見る他者知覚と同一化

宮原 優

1. アシュリー事件

この研究は、メルロ＝ポンティのテキスト、『幼児の対人関係』(Merleau-Ponty 1997)と『見えるものと見えざるもの』(Merleau-Ponty 2002)を読解することによって、アシュリー事件に見られる他者知覚の在り方を考察することを目的とする。まず、この研究で論じるアシュリー事件がいかなるものであるのか確認しておきたい。

2004年、シアトルに在住の重度重複障害の少女アシュリーに対して、3種の医療介入が行われた。エストロゲンの大量投与による身長抑制、乳房の発達を防ぐ乳房芽の摘出、月経やそれに伴う不快症状を回避するための子宮摘出術である。つまりこれらの医療介入によって、アシュリーは、小柄で、乳房もなく、月経もない体になってしまったのである。これらの医療介入が果たされた当時、アシュリーはまだたったの6歳であった。

なぜこのような介入が果たされたのだろうか。彼女の両親によれば「アシュリーの精神的、肉体的な能力の発達は生後3カ月のままである」とされ、当然ながら彼女はしゃべることはできないし、立って歩くことも、寝がえりをうつこともできない。そんなアシュリーの「クオリティオブライフ (QOL) を最大化させるため」これらの医療介入が最善であったのだと彼女の両親は語る。この結果、アシュリーの身長は2012年の14歳の時点で137センチメートルであり、これ以上伸びることはないとされる。また、2012年の時点でそのほかの体の成長についての言及はないが、恐らく乳房が膨らむことはなく、子宮摘出の結果として当然月経もないだろう。こうした医療介入の動機および根拠としてアシュリーの親は一貫して、これは介護者の都合によって意図されたものではなく、あくまで、アシュリーのQOLの最大化を目的としたものである⁽¹⁾と述べる⁽²⁾。なぜ身長の抑制や子宮摘出、乳房の成長阻止がQOLの向上につながるのか。ここで、両親の主張の根拠を確認してみよう。

・身長および体重の抑制

アシュリーの身長が伸び、また体重が増加した場合、アシュリーの幸せは阻害される。というのは、家族によって介護する場合、現在の体重の65ポンド（およそ32キログラム）が限界である。車いすからベッドへの移動、車への移動などが困難になると、家族と旅行や行楽に行く機会も減り、家族と過ごす時間が減ってしまう。また、現在アシュリーの介護の役割を担っているのが二人の祖母と父母であり、現時点でそれらの負担が限界であることを考えると、それ以上の体重増加は完全な家族介護を不可能にしてしまう。またさらにアシュリーの好きな「抱っこ」などもできなくなってしまう。すなわち体重増加や身長の成長はアシュリーの幸せを奪ってしまうものである。

・子宮摘出

アシュリーは子どもを養育しないため、子宮を必要としない⁽³⁾。子宮摘出によって、出血や生理痛と言った、月経周期に伴う不快が回避される。

・乳房芽の摘出

子どもを養育することがなく、授乳する必要のないアシュリーにとって乳房は不快でしかないだろう。大きな胸はブラがなくても快適ではないし、ブラをつけた状態で横になっているのは不快である。

こうした主たる根拠の他に、床ずれの軽減、乳がんのリスクの減少などこれらの医療介入によって得られるメリットを両親は多く語っている⁽⁴⁾。こうした医療行為を両親は「アシュリー療法」と呼び、いくつもの家族が自分たちの考案したこの療法を選択していると語る⁽⁵⁾。この医療介入について発表された2007年、様々な議論が巻き起こった。アシュリーの尊厳と言う観点からの批判、医療上の妥当性を巡る批判、優生思想を懸念する批判などが多く生じた⁽⁶⁾。実際、私たちは多くの観点からこの医療行為を批判し、反対することができるだろう。しかしこの研究は、批判や反論を目的とするものではない。

私がここで考察したいのは、この親子のあいだにいかなる関係が生じているのか、またいかなる関係の下で両親がこうした医療行為を決断しうるのか、という点である。またこの事件を論じるにあたって、もうひと組の親子の関係の在り方に注目したい。この事件に強く反発し、その経緯やその後の展開を一冊の著書にまとめた『アシュリー事件』（児玉 2011）の著者、児玉とその娘である。児玉は彼女自身、重度重複障害児の母親でもある。障害の原因は不明で、今後の展開も予測できないという娘のいる児玉は、アシュリーの状態について「うちの海と良

く似ているように思う」と書きつつ、次のように綴っている。

たとえば、アシュリーの親がやったことに強い不快と嫌悪を感じる一方で、その気持ちには痛いほど分かる。ひょいと抱き上げて、どこへでも連れて行ってやれた幼児期には、ちょっと工夫さえすれば、たいいていのことは経験させてやることができた。多少大きくなっても、親さえ頑張ればそれを維持することができた。しかし一人で抱えあげることが子どもにとっても親にとってもリスクとなり始めた時を境に、どんなに親ががんばってもどうにもできないことが急激に増えた。(略) アシュリーの父親が娘の成長をどうにか止める方法はないかとネットで探さないではいられなかった切羽詰まった思いは、そのまま、かつての私自身のものだ。

(児玉 2011: 242-243)

また児玉は「同じ処置を受けたいと望む親たちの激しい口調」に対して、「正視するのが耐え難いほどの痛みを伴って私に分かってしまうことがある」と苦悩する。彼女は「私は自分の中にも潜んでいる同じ声を聞くのだ」と告白する。「痛いほどに分かってしまう」と言いながら、しかし児玉はそれでもこうした処置を実行しようとはしない。一方アシュリーの両親は、「この処置を娘に受けさせるのは容易な決断でした。手術に伴うリスクや短期的な不快よりも、長期的な利益が遥かに勝っていますから」と繰り返し語る。

私はここで、アシュリーの両親と児玉とのこの決定的な差異のなんであるかを考えたい。「そうしたい」という思いが痛いほど分かるにも関わらず、それでも児玉がこの処置を実行しようとは思わなかったのはなぜなのだろうか。この二組の親子の関係はどのように異なっているのであろうか。

2. 『幼児の対人関係』における「自他の未分化」

自他の未分化

なぜ、アシュリーの両親は「何の迷いもなく」この医療介入を実行できたのだろうか。まず、アシュリーの両親の彼女への関与の仕方を取り上げ、どのような関係が構築されていたのかを考察しよう。

両親は一貫して、これらの医療介入の動機が「アシュリーの QOL の向上のため」であると主張し続ける。「アシュリーにとってブラは不快」、「月経も不快」「大きな体は不快」との主張から示されるように、彼女の両親はアシュリーにとっての快・不快や必要・不必要を断言し、アシュリーの不快除去を最優先に行動している⁷⁾。アシュリーの両親はアシュリーをどのように知覚し、どのような知覚がこれらの行動の根拠となっているのだろうか。人はどのようにしてアシュリー

一の両親のように他者の快・不快や幸せ不幸せを判断できるのか。この点に関してメルロ＝ポンティは『幼児の対人関係』の中で、ヴァロンやラカンなど当時の心理学の見解を示しつつ、大きな示唆を与えてくれる。

アシュリー事件を考えたとき、まず私たちが懸念するのは、いったい他者の快や不快、幸せや不幸せがそんなにも容易に理解できるものであるのだろうか、という点である。他者が何を欲しているのかを知覚しうることは、ときに私たちにあってあたかも奇跡であるかのようにも思われる。他から分かれたれ、皮膚によって閉ざされた個体同士が互いの快・不快を察しうることは、海によって隔てられた孤島同士が、互いの様子を知り合うことにも類するように思われるのである。

ところがメルロ＝ポンティは『幼児の対人関係』の中で、当時の児童心理学の見解が、こうした孤島のような在り方とは全く別の人間の在り方を示していることを明らかにする。私たちは通常、人間は個として互いに区別され互いに独立し合っていると考える。そのような分かれた個体が、やがて他の別の個体と出会い、関係を築いていくのだと考える。しかしながら、メルロ＝ポンティは、むしろ幼児期に人は自己と他者とを分けない未分化な状態にあると、それらの区別がないところからやがて自己と他者とを分けていくのだと主張する。

メルロ＝ポンティはヴァロンの記述を取り上げ、幼児はそもそも自己と他者とを区別しておらず、自分の見ているものと自分とを区別しないと指摘する。歩くことも、また発話することもできない幼児は、母親や父親、周囲の大人を通じて空腹や寂しさを満たそうとする。赤ん坊の意志や志向は赤ん坊の内部に閉ざされ止まっているわけではなく、言うなれば赤ん坊は他者の身体を通じて意志を実現するのである。これはある主体が、他者を己の欲望に従わせようと決意した暴力というわけではなく、「むしろ自己について知らず、自己であるかのように他者の中で生きる自己の姿勢」(Merleau-Ponty 1997: 180)である。メルロ＝ポンティに従えば、こうした態度は「自他を区別していない」「無知な」態度なのであり、何らか明白に自己を確立している態度、他者を自己に従わせようとする暴君としての態度ではない。「アシュリーは赤ちゃんと何も変わらない」とする両親の言葉に従えば、運動の不自由なアシュリーが、赤ん坊のように両親や家族を通じて自分の意志を実現していることは容易に想像ができるだろう。しかしながら、このような未分化は、アシュリーだけに指摘されうるものではない。

人はそもそも幼児期、こうした自他の弁別のなされない未分化な世界を生きている。幼児はその後に成長に従って自他の区別を身につけるようになるのだとメルロ＝ポンティは主張する。とはいえ、彼が強調するのはこうした自己と他者との未分化が、その後の自他の弁別の修得によっても、決して完全に消失してしまうわけではないという点である。自他の区別の根底に自他の未分化が残り

続けるというこうした在り方は、奇異に思われるかもしれない。しかしながら実は、私たちの身近なところでしばしばみられるものである。例えば私たちは、自分の身体能力によってはとても達成することのできない運動、ダンスやバレエ、スポーツなどを見て楽しむ。このとき私たちは「自分が見ているに過ぎないその行為を、言うなれば離れた所から生き、それを私の行為にし、それを理解する」(Merleau-Ponty 1997: 178) ののである。こうしたことが可能であるのは、そもそも自己分離の根底に自他の未分化が存するためであるのだと言われる。

メルロ＝ポンティはこうした未分化な在り方が、成人にあっても残存するというにはとどまらず、むしろこの未分化こそが、他者知覚を可能にしていると示唆する。例えば「共感」は我々がしばしば体験し、また人間らしい経験を可能にしている能力であるが、こうした「共感」の根源にも、自他の未分化があるとメルロ＝ポンティは指摘する。幼児期に顕著に見られる自他の未分化は、大人になっても愛や共感、感情移入を可能にするものとして残る。彼は、他者と自己との分かち難さについて次のように語る。

誰かと結びつけられるその瞬間から、人はその相手の苦しみに苦しむことになります。肉体的苦痛が問題になる場合、人が比喩的にしかそれを共有することができない場合、人は自分の無力を強く経験します。…(略)そして誰かと結ばれるということは、結局のところ、少なくとも意図としてはその人の生活を生きるということです。(Merleau-Ponty 1997: 227)

自他の未分化は人間の根源的な在り方として愛や共感を支えているのだと理解したうえでこの個所だけを読むならば、アシュリーのQOLを判断し、医療介入を実行したアシュリーの両親の行為は「愛」として語られうるだろう。

両親は、アシュリーについて「彼女は家庭にバロメータを設置してくれます。彼女が幸せなとき、私たちは幸せだし、そうでないときは私たちが幸せではないのです」と述べる。ある人が幸せであるとき、自分も幸せである、またその人が不幸なとき、自分も辛い。そういったことは私たちの生活でも頻繁に見られる。恐らく、アシュリーとアシュリーの両親に限らずとも、多くの家族についてこのことは言えるであろう。メルロ＝ポンティによればこうした感情の共有は、決して理知的な判断によってえられるものではなく、私たちの身体の根本的な在り方によって可能になるとされる。

こうして、身体性が自他の未分化を確保しているとの主張に従うと、アシュリーの快・不快を知覚することに問題点は見出しがたい。恐らくどんな親子でも、「それはあなたの問題で、こちらは私の問題だ」などと全てに線引きすることな

ど不可能である。ましてや、発話することができず、自らのQOLのための積極的な行動が極めて制限されているアシュリーにおいては、両親がアシュリーの身体に代わってアシュリーに働きかけなくてはならないことが多々あるだろう。

しかしながら、『幼児の対人関係』においてメルロ＝ポンティの示すこうした「未分化なものとしての他者知覚」という考え方には、或る問題点が指摘される。

「自他の未分化」の問題点

こうして、自他の未分化な在り方はおそらくアシュリーに当てはまるのみならず、また彼女の両親の在り方としても語りうる。ところがメルロ＝ポンティは「愛する」ことを可能にするこの自他の不可分さ、未分化が、「愛」だけでは語ることのできない事態を招きうることも記述している。

メルロ＝ポンティは、「嫉妬深い人とは、自分自身だけでなく他人の経験までも自分のものとして生きようと、また他人の態度をも自分の責任において引き受けようとする人のことなのだ」というヴァロンの見解に基づき、『失われた時をもとめて』の主人公の恋を分析する。この主人公は、ある女性に恋をするが、その恋は非常に苦しみに満ちた恋であった。というのも、その女性の過去や不在は彼にとって「我慢ならない」ことであり、自分と出会う以前に彼女が存在していたということにすら苦しむのである。つまり彼女のすべてを自己に対して顕在化できないことが、彼を非常に苦しめるのだ。メルロ＝ポンティはこの主人公の態度が自分と他者とを「同一化」させようとする態度であると指摘する。「自分の知らない他者の側面」を受け付けず、徹底して拒む態度は、何らか愛と呼ぶだけでは語り得ない。

ここでまた私たちはアシュリーの両親の態度について新たな観点から語ることができる。アシュリーの両親は、アシュリーとの「今のままの関係」を望む。まだ経験したことのないアシュリーの体の変化、自分たちの知らないアシュリーの姿を拒む。こうした両親の態度は、相手の知られざる側面を受け入れられないこの主人公の態度、「同一化」であるようにも思われる。もちろん、語ることもできず、目を合わせてくれることもほとんどないと言われるアシュリーの両親は、この物語の主人公とは全く異なる状況に置かれている。「抱き上げて運べなくなったら」「また新たに予測もできないような問題が生じてしまったら」「もうこれ以上は、親として対応しきれないかもしれない」彼らのそのような思いは想像に難くない。アシュリーの両親でなくとも、障害を有する子どもの親がその子のまだ見えない「これから」に臨むことに対してそうした恐怖感を抱くであろうことは児玉の記述からも明白に見てとれる。またこの恐怖感が、嫉妬や所有欲という

よりは「この子を不幸にしてしまうかもしれない」ことに対する恐怖感であることも考えられる。アシュリーの両親の態度を嫉妬や所有欲で片づけるには、あまりにも酷であろう。

しかしそのように考えたとき、考察すべきはむしろ児玉の姿勢である。アシュリーと同じような子を持つ彼女が、これらの恐怖を避け得たわけではないことは、「彼らの気持ちが分かってしまう」と繰り返される言葉からも容易に理解できる。しかし児玉はアシュリーの両親がとった行動を避け得た。なぜ彼女がアシュリーの親と同じことをしなかったのか、その点について児玉は何も語っていない。にもかかわらず、私たちは児玉の姿勢をこそ支持したくなる。それは、他者知覚や他者との関係の形成において、私たちは何ごとか「同一化」や「未分化」より他のものを経験しているからではないだろうか。

メルロ＝ポンティは、幼児期における自他の未分化が克服されえるものではないことを示しつつ、しかし成長に伴ってそれとは別の関係が育まれていくことを示唆している。彼は、いわゆる大人の「共感」や「愛」と幼児における「同一化」を可能にしているのは同じ「自他の未分化」でありながら、しかし両者の間には決定的な違いがあることを強調する。メルロ＝ポンティは「同一化」とその後の成長に伴って獲得されていく関係との差異について次のように語る。

最初の自我はこのように自己自身について何も知らず、同時にそれに応じて自分の限界もわかっていないわけです。それに反して大人の自我は自分自身の限界を知っておりながら、同時に、少なくとも相対的には当初の共感とは異なる本当の共感によってそこを超え出る能力を有する自我になっていきます。(Merleau-Ponty 1997: 180)

幼児の同一化が「区別を知らない自他の未分化」であるのに対し、大人の「共感」や「愛」は「他者と自己との弁別の上での自他の踏み越え」とであると言われる。では、その「自他の区別」はどのように果たされ、またその「区別」はどのように乗り越えられるのだろうか。この弁別の達成を説明するため、メルロ＝ポンティはラカンの「鏡像段階」の理論を紹介する。すなわち人は自他の弁別のない状態から、鏡像を通じて「自分が島国のように他から分かたれている」ということを学び、それを知性ではなく、体の感覚として学ぶことによって自他の弁別を果たしていく。つまり、人は自己を「客体」として眺めることによって、自他が分かたれたものであることを体感として修得していくと言われるのである。こうして、自分が「見るもの」であるばかりではなく「見られるもの」でもあることが体感として受け入れられていくにつれ、自他の分離が果たされていくとメルロ＝ポンティは語る。しかしながらその記述は十分説得的であるとは言い難い。

というのも、このような「自他の別を弁えた共感」と先に見た「同一化」が知覚としてどのように根本的に異なるのか、また自他の弁別を踏み越えるとはどのようなことであるのか、この考え方では全く説明できないからである。

『幼児の対人関係』において描出される他者知覚の在り方を考察するかぎり、私たちはアシュリーの両親の姿勢が生じうるものであることを確認した。しかしながら、アシュリーの両親の態度と児玉の態度との決定的とも思われる差異が何に由来するものであるのか、この講義録の中に見出すことはできない。実は、この残された課題こそ、『幼児の対人関係』においてメルロ＝ポンティが示唆した問題点なのである。

3. 『見えるものと見えざるもの』における「可逆性」

「可逆性」による知覚

自他の未分化は成人にあっても残るものでありながら、しかし自他の弁別も果たされていなくてはいけない。『幼児の対人関係』に示されたこの矛盾を説明するため、メルロ＝ポンティは、「鏡像」、「見られている自分」の体感、いわゆる弁別機能を、時に消失してしまったり、また出現したりする極めて不安定なものとして位置づけるのである (Merleau-Ponty 1997: 197-208)。

しかしながら『幼児の対人関係』の講義からおよそ10年を経た遺稿録『見えるものと見えざるもの』において、メルロ＝ポンティは他者と自己の繋がりとその弁別を全く違った形で提示する。『見えるものと見えざるもの』では、自他のつながりと弁別が、二つの段階としてではなく、同じ一つの知覚作用の二つの側面として位置づけられているのである。他者との近さの実現であると同時に弁別の実現でもあるこの原理を、メルロ＝ポンティは「可逆性 *reversibilité*」と言います。

身体は、その表皮の内にとどまるものではなく「自己でないもの」を感覚するものである。かつまた一方で自己自身を感じるものである。『幼児の対人関係』では、自己ならざるものを感じるものがまた自己を感じることでもあるという点に、自他の未分化が指摘された。しかしながら『見えるものと見えざるもの』における知覚の構造は、自他の未分化を前提しはしない。なぜ「自己」と「自己でないもの」が混ざり合わないのか。その同一化を不可能にしているのが「可逆性」と呼ばれるこの表裏構造である。

この表裏構造を最もよく表現している、手による知覚を例に考えてみよう。ものに触れて知覚するとき、私の手とそれによって触れられるものは表裏構造をなす。私は自分の手のひらを通じてものを知覚し、その一方で自分の触れているものを通じて、自分の手のひらを感じるができる。これと同様に私は他者を眺

め、また他者から眺められていることを感じるができる。つまり私は他者を見る一方で、また他者の側から眺められている自己を感じるができる。ところが、私は触れている自分の手を知覚することも、また触れられているものを知覚することもできるが、同時に両方を何ものかとして知覚し、捉えることはできない。双方のうち的一方が他方の出現の媒介となるため、私の肉体が媒介となって何ものかを出現させるか、あるいはものが媒介となって私自身を私に対して何ものかとして出現させるか、そのいずれか一方なのである。知覚はこのように、同時に両立することのできない自他の相互媒介として成り立っているため、両者の交通は確保されつつ、さらにそれらは混同されることなく弁別される。私たちの身体は、感覚するものとして自己ならざるものへの超過を宿命づけられていると同時に、その肉体そのものによって自己ならざるものとの隔たりの形成を余儀なくされている。両者の間の交通を双方向から可能にするものが、同時にそれらを隔て、自己と他者との同一化を許さないのである。

自己と他者との未分化を前提とせず、しかし自己を媒介として他者へと至るこうした知覚の在り方は、一体化なき共感を可能にする。これは『幼児の対人関係』においてメルロ＝ポンティがその重要性を指摘しながらも説明し得なかった、大人における関係の在り方である。

『幼児の対人関係』においては描出されなかったこの「分離」と「隔たり」は、また『見えるものと見えざるもの』において「汲み尽くしがたい奥行き」の出現」として語られている。私たちは身体を通じて他者を知覚する。このことはまた、「見えるもの」「他者」が常に、私に対して見えているその向こう側、見えざることを携えて出現しているということの意味する。メルロ＝ポンティは、こうした、「見えざる場所」「知られざるもの」の告知としての見えるものの出現を、「奥行き」と呼び、知覚における根本的な出現形態として語る。この「奥行き」は今ここから見えているところ、今は見えないところ、ここからは見えなところなど、様々な眺めの共存の形態として、一つの全体の出現の仕方として記述される。すなわち知覚は常に「決して全的に顕在化されることはない」ということをその本質としている。したがって、他者や一つの出来事などが、単一の「見られ」、単一の「現れ」に帰されてしまう場合、それらは知覚とは言われえず、思い込みや理解など自己への同一化として解される (Merleau-Ponty 2002: 268)。メルロ＝ポンティは、「見えるものの特性は、汲みつくしがたい奥行きをもつ表面であることだ」(ibid.: 186)と語る。これに従えば、他者はいつまでも私にとって、これから理解されるべきものを孕み、今後知られるべきもののあることを告知するものとして出現する。私たちは確かに、他者の経験に迫ることができ、他者の身体が感じつつあるものを知覚することができる。しかしその知覚は

必ず、なお問いかけ続けなければならないものとして与えられているのである⁽⁸⁾。

例えば家族であれ、また全介護を要するものであれ、他者は常に知られざるところを告げるものとして、これから理解されるはずのことを携えて初めて他者として出現しうる。このように考えられたとき、なぜアシュリーの両親が何の迷もなく医療介入に踏み切ったのか、またなぜ極めて困難な状況に立たされながらも児玉が同じ処置を受けないのか、その処置に嫌悪感を抱きながらも「分かってしまう」のか、私たちはこの問題に近づくことが出来る。

他者のいかなるものであるのか、いかなる未知を孕んでいるものであるのか、それはどんな近い人間にとっても不確かである。自分の知らない他者の側面、あるいはこれから見えるものになっていくであろう見えざる側面は、私たちに希望と同時に不安と恐怖を与える。人は未だ知られざるところを引き受けるよりは、自分にとって確かに思われること、見えているところにすがりたくなる。娘の成長を思うと、児玉は「このまま時間が止まってくれば」と願ったのであった。児玉の、まだ知らない未来へのこの恐怖は、また「させてやりたい」という自らの願望の外側に足を踏み出す恐怖に由来するとも考えられる。しかし、娘との関係の中で示された、「尋ねられるべきものとしての他者」は恐らく児玉に、自己の理解や願望から踏み出す力を与えるものであったはずだ。私たちはここで、アシュリーの両親と児玉の行動の違いを理解する。アシュリーの両親がアシュリーにこの奥行を拒んだ一方で、児玉は娘の奥行きに立ち臨んだのだと言い表すことができるだろう。アシュリーを「奥行」として知覚できなかったアシュリーの両親はアシュリーの「これから」に立ち臨むことができなかった。この関係の問題点はまた、別の語り方で語られ得る。

4. 他者によって見られること

『幼児の対人関係』では、自他分離は、自己の「見られるもの」であることを受け入れるにつれ果たされているということが示されていた。とはいえ「見られるものとしての自己」の自己に対する出現はラカンやヴァロンの鏡像段階の理論によって説明されており、「見る」ことと比べると甚だ後天的なうえ、不安定に消失したり出現したりする身体的な感覚の修得として位置づけられていた。『幼児の対人関係』において、「共感」や「愛」における相互交通を語るために、メルロ＝ポンティはどうしても「分離」が完全には果たし得えないものであると、「未分化」が人間関係の根底において残り続けるのだと考えざるを得なかったのである。

その一方、『見えるものと見えざるもの』における知覚の描出に従えば、自己の「見られるもの」であること、自己がまた他から分かたれているものであるこ

とは、鏡像を通じて自己自身の体感として修得するものではなく、他者を見ることそのものを通じて、「他者によって見られていること」を感じることに言い表されている。ここにあって私たちは、アシュリーの両親の自他分離の不達成がまた、「アシュリーによって見られているという感覚」の欠落を意味していることを指摘することができる。実際、アシュリーの両親は、アシュリーについて「そばに人がいることには明らかに気づいているのに、目を合わせることは稀である」と語っている。アシュリーの両親は「アシュリーによって見られている」という感覚に欠けていたことがうかがえるだろう。

では、この「見られている」感覚の欠如は何をもたらすだろうか。「見られている感覚」を持つということ、他者によって見られているのを感じることは、また自己が自己自身にとって見えるものとなること、他者に対して出現している自己が自己にとって感じられるものとなることを意味する。『見えるものと見えざるもの』では、「見られるものの特徴は、汲み尽くし得ない奥行きを携えていることだ」と言われた。つまり、「他者に見られている」感覚を持つことによって、自己は自己自身に対して、汲み尽くし得ない奥行きとして、これから尋ねられるべきものとして出現するのである。

『見えるものと見えざるもの』に従えば、人は、自己ならざるものに触れることによって、あるいは自己ならざるものを見ることによって自己自身を感じるのであった。このことはまた、他者のまなざしを通じて自己を見ることとして言い換えられる。通常、自己は自己自身にとって明らかであるように思われ、自己は自己の思い通りに動きうるようにも思われる。しかしながら、他者のまなざしにおける自己を感じる時、私たちは他者のまなざしの中の自己が自己によってはどうにもならないものであることを思い知らされる。人は、自己が自己の思い通りに現れるわけではないということ、自己は自己の思いにのみ属するのではないということに気がつかされる。他者のまなざしを通じて私たちは、自分の思い込みから抜け出たところから自己自身を感じるができる。他者のまなざしを通じて、私たちは、自己にとってすら知られざるものとしての自己に立ち会うのである。

他者のまなざしに晒されているものとしての自己を感じることは、自己自身にとって未だ知られざるものとしての自己、なお尋ね求めなければならないものとしての自己を感じることである。これはまた、私自身によって知られえない私自身の可能性の、自己に対する出現を意味する。今とは異なる自己の在り方、今見えているのとは違う幸せの在り方を、私たちは他者のまなざしの中に見出すことができる。およそ、誰かと共に生きていこうと考えるとき、多くの場合人は相手との関係をずっと同じ形のまま持続しようとしていこうとは考えない。相手が変

容するものであると感じ、また自己もそれに応じて変容していけるであろう可能性を感じる⁹⁾。「汲み尽くし得ない奥行き」としての他者は、まだ見えていない「これから」を示唆する。それが恐怖の対象となることもあるだろう。しかしその一方で、他者のまなざしのなかに「自分の思いもよらなかったこれからの自分」「変わっていけるものとしての自分」を感じることもできる (Cf. 宮原 2011)。他者を見ること、他者によって見られることは、互いの可能性を支え合う関係を可能にする。これを欠いたとき、人は、「今ここでないところ」へと向かう在り方を失い、「ずっとこのまま」の内に閉ざされざるを得ない。

児玉は、その著作で、両親のブログに見られるアシュリーの写真をみてほしいと訴える。そのうえで彼女は、アシュリーがカメラ視線をとっていること、つまり写真をとっている人間が「見つめられていること」に強く注意を促す (児玉 2011: 63)。こうした児玉の態度、子どもの目線の行く先を感じようとし、また見られていると感じようとする態度は、「目をあわせることは稀である」と語るアシュリーの両親の態度とは対照的のように思われる。

5. 結びにかえて—他者知覚の環境

私たちは、見ることによって他者の奥行き、可能性に立ち会い、また見られることによって自己自身の奥行きや可能性に立ち会う。他者知覚におけるこの双方の奥行きの出現において、人は、これからへと、この先へと踏み出す道のみを見出し得るのである。この、自己と他者との互いの「奥行」の出現の有無は「他者知覚」と「一体化」という決定的な差異として語られうる。とはいえ私たち自身、この決定的な差異の間を、自己の意志によってはコントロールし得ないような仕方で行き来している。

私たちは、自分が普段使っているコーヒーカップやテーブルに「汲み尽くし得ない奥行」を見出そうとしたりしない。つまり、ものの在り方、現れ方を探求し続ける芸術家のようなまなざしでそれらを眺め、カップを割ってタイルの一部にしようしたり、「この花の色彩はいったい私に対してどのように表れているのだろうか」と考えたりはしない。それは当然ながら、カップや花に奥行がないからではない。私たちは自分の生活の基盤としての日常を構築するために、周囲のものを自己と一体化せざるを得ないのである。身の回りの物を自己と同一化することは、また身の回りのものを「知覚しないで済むようにする」ことを意味する。こうした同一化を通じて私たちは自分の生活の基盤となるような「当たり前」を築いているのである。私たちは、朝のぎゅうぎゅう詰めの満員電車の中で他者のまなざしを一つ一つ感じることもない。もしも他者の一人一人に対する自己の現れ方を感じ、またその一人一人の奥行きを感じていたら、私たちはとても

日常生活を送りえないだろう。「他者に奥行をみないこと」「見られていることを感じないこと」は、私たちが日常、当たり前のようにとっている態度である。こうした「同一化」の態度こそが私たちの「当たり前」を形成し、日常生活の基盤となっているのだ。我々のこうした在り方を考えたとき、メルロ＝ポンティが『見えるものと見えざるもの』において描出する「知覚」、つまり「奥行を問うものとしての知覚」「自己自身の可能性を感じさせるものとしての知覚」が、常に達成されるわけではないことが指摘できる。

河野はその著作において、身体と環境が相互作用として対になって成立しているとする生態学的見解から、いかなる能力も一定の環境と対になって初めて可能になると主張する(河野 2006)。例えば、急な傾斜のある坂道や岩場で縄跳びができなかったとしても、それはその人に縄跳びの能力がないわけではない。環境が縄跳びの能力の実現を妨げているのである。そのように、あらゆる能力の発現はそれを可能にするような環境を前提としている。知覚の能力にもまた、同じことが指摘されうるだろう。私たちは、近すぎるところから、遠すぎるところからは、対象を知覚することができない。それと同様に、また他者を知覚できなくなってしまふような環境、満員電車の中のように、他者知覚が極めて困難になってしまうような環境というものがある。ものごとの知覚において、知覚するものとされるものとの間に適切な距離が必要であるように、また他者知覚にも適切な物理的状況や条件があるはずだ。

児玉は、介護する親たちの、ギリギリの悲鳴を記述する(児玉 2011: 245)。排尿、排便の世話から経管栄養の管理、入浴、月経時の世話からまた男児の場合は性処理まで、すべて親が抱え込まざるを得ない状況で、他者知覚が容易に果たされるとは考えにくい。アシュリー療法に駆り立てられてしまう親たちがいるということ、それを痛いほどにわかってしまう親たちがいること、それらの事実は彼らの置かれている環境が他者知覚を困難にさせているということを示している⁽¹⁰⁾。

注

- (1) アシュリーの両親はブログ上で何度となく、この療法は決して介護者の利便を目的としているわけではないと表明している。しかしながらこの医療介入の擁護派にもまた反対派にも、この介入を「介護者の利益のため」とする解釈が見られる。
- (2) アシュリーに関する情報は以下、言及がない限り、下記の両親のブログとそこに含まれる論説文を筆者が訳し、まとめたものである。

<http://www.pillowangel.org/>

<http://pillowangel.org/Ashley%20Treatment%20v7.pdf>

なお訳にあたっては、児玉(2011)を参考にさせていただいた。

- (3) 未成年者の子宮摘出術を行うには裁判所の許可が必要となるが、アシュリーの場合、これを得ていなかった。この点について手術を行った Seattle Children's Hospital も記者会見を開いて違法性を認めているが、両親は2012年のインタビューにおいてもまたブログにおいてもこの点に言及していない。
- (4) 金井は科学技術が女性を多くの苦痛から解放したことを認める一方で、とりわけ女性の身体が端的に科学的操作対象となっていることを指摘する。Cf. 金井 (2002).
- (5) Cf. <http://www.guardian.co.uk/news/2007/oct/08/medicineandhealth.uknews> *The Guardian*, 8 October, 2007.
- (6) アシュリーの担当医師たちはこれらの批判に反論し、倫理的妥当性の根拠を挙げている。Cf. Diekma & Fost (2010).
- (7) 快か不快かを問うのであれば、多くの女性にとって月経の経験もまた乳房も不快なものであるだろう。しかし当然ながら「不快は除去すべし」というこの姿勢自体に疑問が呈され得る。2003年、アメリカにおいて月経の回数を抑制する薬剤が発売されたさい、月経を「とりはらうべきなものか」と見做す製薬会社のアピールに対して大きな議論が生じた。Cf. Mano & Fosket (2009).
- (8) J. Cole は「その人がどのような観点からどのような状況に置かれているか」を考察することは可能であると主張する。しかしそのさい、重度の障害を負った人々に対して「自殺を希望するのは妥当」との判断を下した数々の裁判の例を挙げ、「私だったらどうするか」といった軽率な発想による「共感」に警告を発している。Cf. Cole (2004: 101–104).
- (9) 熊谷はこうした親子の在り方を、実に生き生きと「竹細工」のメタファーで描き出している。Cf. 綾屋、熊谷 (2010: 55–58)
- (10) 医療介入よりもむしろ周囲環境の改善や地域の充実を図るべきだとするこうした見解も多くみられる。Cf. Stein (2010). その一方で、現実問題としてこうした支援が欠けていることからアシュリーの両親の選択が妥当であること、また両親に対する支援が「子どもを愛する義務を放棄する親への支援」になりかねないとする見解もある。Cf. Liao et al. (2007).

文献

■ 欧語文献

- Cole, J. (2004). *Still Lives-Narratives of Spinal Cord Injury*, Cambridge: The MIT press.
- Diekma, D. S., & Fost, N. (2010). Ashley Revisited: A Response to the Critics. *American Journal of Bioethics*, 10: 30–44.
- Liao, S. M., Savulescu, J. & Sheehan, M. (2007). The Ashley Treatment: best interests, convenience, and parental decision-making. *Hastings Cent Rep.* 37(2): 16–20.
- Mano, L. & Fosket, J. R. (2009). Pharmaceuticals and the (Re) Making of Menstruation. *Signs*, 34(4): 925–949.
- Merleau-Ponty, M. (1997 [1964]). Les Relations avec l'autrui chez l'enfant. In *Parcours 1935–1951*, Lonrai: Verdier, pp. 146–229.

—— (2002). *Le Visible et L'invisible*. Ed. Lefort, C., Paris: Gallimard.

Stein, G. L. (2010). 'Ashley's Case: The Ethics of Arresting the Growth of Children with Serious Disability.' *Journal of Social Work in Disability & Rehabilitation*, 9(2&3): 99–109.

■邦語文献

綾屋紗月・熊谷晋一郎 (2010). 『つながりの作法：同じでもなく違うでもなく』東京: NHK 出版.

金井淑子 (2002). 「身体・差異・共感を巡るポリティクス」『身体のエシックス／ポリティクス：倫理学とフェミニズムの交叉』京都: ナカニシヤ出版、pp. 3–35.

河野哲也 (2006). 『心はからだの外にある：「エコロジカルな私」の哲学』東京: NHK出版.

児玉真美 (2011). 『アシュリー事件：メディカルコントロールと新・優生思想の時代』東京: 生活書院.

宮原優 (2011). 「見られるものとしての身体—サルトルの現実とメルロ＝ポンティの希望」『現象学年報』27: 131–139.

Abstract

Yuh Miyahara, "Empathetic Identification and Person Perception in the Ashley Case". In Ishihara, K. and Inahara, M. (eds.), *UTCP Uehiro Booklet*, No.2. *Philosophy of Disability & Coexistence: Body, Narrative, and Community*, 2013, pp. 27–41.

It is natural to feel uneasy about the 'Ashley treatment', a controversial treatment where a child with a developmental disability, 'Ashley X', was given a hysterectomy and bilateral breast bud removal, which limits a child's growth. It is easy to criticize Ashley's parent's decision do so. The purpose of this essay, however, is not to criticize her parents, but to discuss the way we understand what was done to her. How can they decide whether to intervene in such a way? Comparing Ashley's parent's decision to that of another mother, Kodama, who has a daughter with a severe developmental disability, this essay explores the issue of medical intervention in such cases. Kodama confesses a profound empathy towards Ashley's parents. At the same time, however, she raised an objection to decision of medical intervention which was made by them. I argue that a difference between Ashley's parents and Kodama derives from a difference between empathetic identification and perception, and that Ashley's parents don't perceive Ashley as a person. Empathetic identification is needed and plays an important role in communication, and cannot be controlled by any one subject. Empathetic identification, however, is not enough for communication. On the other hand, understanding other persons is far more difficult than what we imagine. On a rush hour train, for example, we don't perceive a person as a person, who has a future and a past. We need an appropriate environment to perceive a person as a person. The problem of Ashley's parents is not a lack of a sense of morality, but of an appropriate environment.